三年六カ月、私の足跡

長野県　白鳥幹誠

大正十三（一九二四）年二月二日、長野県伊那市箕輪大泉新田で、十一人家族の長男として生まれました。当時の家族構成は爺さん、婆さん、両親、姉が二人、弟二人そして妹が二人でした。

家は農業を主として、二頭の馬を飼育しており、馬で荷物の運搬もした。主に山からの材木の切出し、その搬出作業などが多くあり、私も父に習って一頭の馬の世話や操る事が身に付いた。これが後々大いに私を助けることになりました。

小学校から高等科へ進み、十九歳で兵隊検査を受け、第一乙種合格となり現役兵要員となった。

昭和十九（一九四四）年二月十日に現役兵志願として広島に集合を命ぜられました。門司から船で朝鮮の釜山へ渡りましたが冬の玄界灘の荒波には大いに苦しみました。

釜山から列車で満州黒河省勝武屯の第六九四部隊（第五国境守備隊）に入隊し、第一中隊の野砲兵手として初年兵教育を受けた。長野出身ですのである程度の寒さには強いはずだが、ここの寒さは身にこたえるものがあった。防寒衣服は身に付けているせいもあって動作が鈍い感じです。

当時、満州や朝鮮の兵隊には防寒服が支給されたが、内地の部隊では、冬でも北海道、長野県の部隊のみが防寒服が支給されたと聞きました。

初年兵教育は、毎日厳格そのものの訓練が行われ、野砲の教育のほか高射砲の据付作業にも従事しました。私は砲兵ですが、昭和十九年五月十日、一期の検閲を受け、その後は陣地構築の作業ばかり、連日連夜、従事いたしました。

昭和十九年六月十日に転属要員となり、北安省克山にあった「光」第二六三〇部隊、通称第十一軍軍馬防疫廠に転属し、六月二十日にはハイラル支廠に分遣されることになりました。その後十月には克山に戻り、今度は蹄鉄工務兵としての教育

を受けることになりました。
　野砲隊には相当数の軍馬がおり、馬は蹄鉄無くして重量物の引架は出来ません。蹄鉄作業は野戦では場所を選ばず速やかに着装することが要求されます。そのためか私は周辺の各地の部隊からも要請され、この作業のため派遣されました。
　その他、軍馬の病気の検査や手当、消毒等にも従事してきました。もともと私の器用さもあったため、軍隊内では特異な特業兵として大いに役立ってきたと思われます。このことは、若い時から馬に接し、馬の扱いに慣れていた賜と思っております。遠くはチチハルまで分遣されたものです。
　昭和二十年夏近くまで、私は各地に分遣されることが続いた訳ですが、遂に八月九日、ソ連軍の国境侵攻が始まり、満州全域が混乱の極みに達しました。部隊は克山で終戦となり、武装解除を受け、平安に集結しました。かくしてソ連抑留となり、九月末にブラゴエシチエンスクに行く訳ですが、その行軍には十日以上かかり、その間歩き通しで、足には豆が出来て痛く、ちょっとした休憩時には軍靴も脱ぎ、豆の水を出し、ヨーチンを塗布してまた進むという苦痛の行路でした。
　ようやく黒竜江河畔にたどり着き、黒竜江を舟で渡河しました。ここでの私の体調は極端に悪化し、自分では自由がきかず、戦友に助けられる始末でした。とうとう極端な栄養失調となり、ブラゴエシチエンスクの病院に入院となりました。しかしながらこの病院では暖を取ることも出来ず、防寒手袋に足を入れて温める状態でした。
　約二十日の入院でしたが原隊の戦友は一人もおらず、退院後は奉天第五十二作業隊大隊に入りました。ソ連軍は満州より持ち去った鉄舟で黒竜江に橋を架けましたが、先発隊が渡ると間もなくこの鉄舟橋は流出してしまいました。
　十二月に入りますと黒竜江は完全に凍りつきブラゴエシチエンスクでは焚火をして暖を取りました。その翌日「東京ダモイ」の声で貨車に乗りましたが、帰国どころかウランウデに抑留されまし

た。ここは屠殺場で、缶詰作業や糧秣の貨車への積み込み、積み下ろし作業で、十人ほどで六十キロの麻袋を一日掛りで六十トンぐらいを処理する使役でした。もちろん、麻袋は手掛りはなく、掴んでも滑り易く、全く苦労の連続でした。

昭和二十一年四月、ガルホン地区に移動しました。ここでの作業は伐採専門でした。シベリアの原始林は凍土のため樹木は直根はなく、浅い土中を蛸足のごとく横に延ばしており、地表にも根茎が一面にはっております。伐採作業は非常に危険が伴います。

倒木の際には直幹が異状に踊り跳ね太幹で頭を叩かれ即死する者、また「行くぞ！」の近辺の作業員からの声に逃げ切れず、また細枝で鞭で打たれるごとく胸を強打され即死するなど、体力のない仲間はここで多くの犠牲者となりました。

集合時になると、皆集合場所まで急ぐが、根茎に足を取られて転倒し、なかなか前に進むことができません。皆極端な栄養失調の体ですから。

昭和二十二年五月、ホーレンスクもようやく暖かくなってきました。ここでは人力で木材を河畔まで担ぎ出す訳です。ここでも多くの方々が落命されております。誠に痛ましい限りでした。ある時は鉄道の保線作業にも狩り出されました。疲れた体で休む夜となりますと、今度はあの南京虫とシラミが襲来して眠るところではありません。

ウランウデの収容所では、私は馬の使用者として給水塔から炊事への飲用水の運搬作業に回りましたが、これは大変手馴れた仕事でしたのでホットしたものでした。つくづく馬の取り扱いが私を助けてくれたものだと思いました。

昭和二十二年七月ごろ、ウランウデからナホトカに移動し、戦時標準船「永緑丸」にて舞鶴港に上陸した日が八月九日でした。ようやく憧れの故国に帰ることができて思わず涙したものです。入隊以来三年六カ月、父母の待つ山青く水清き故郷、箕輪です。家族は九人となっておりましたが、私は屋根職人として今日まで励んできました。